

大学卒業後は、別の道へ進もうと思っていた。上越市の面積の約5割を占める森林。そんな大自然を守り育てる仕事「林業」で活躍する江口里江子さん。作業現場にお邪魔すると、明るく迎えてくれました。東京都出身の江口さんは、将来は研究職に就こうと東京農業大学で栄養学(二年制)を専攻しますが、森林総合科学科の学生との交流から林業に興味を持ち、四年制の同学科に編入しました。実習で木を切り倒したときに「この仕事いいかも」と直感的に感じ、体を動かすことが好きだったことも相まって、林業の道に進むことを決意しました。大学卒業後は、阿賀町で地域おこし協力隊として3年間、林政に関する活動をした後、東蒲原郡森林組合(阿賀町)に入組しました。その後は、上越市出身の夫の達也さんのUTターンを機に移住し、くびき野森林組合で達也さんと共に活躍中です。

初めて木を切ったときから林業にハマっています



くびき野森林組合
江口里江子さん(31歳)
(頸城区)

大学卒業後は、別の道へ進もうと思っていた。

自分自身が自然と向き合える職業。

「林業は、木材の生産だけでなく、森林を整備することで水源を守ったり、土砂崩れなどの自然災害を防いだりと、多様な役割を担っています」と江口さんは話します。主な業務は、森林の成長に応じて樹木の一部を伐採し、林内密度を調整することで森林の成長を促す「間伐」と、住宅敷地内などの不要な木を切る「特殊伐採」です。「林業の魅力は、自分自身が自然と対峙できることです」と話す江口さん。「同じ樹種でも、大きさや形が同じものはないので、自分の持つ知識や技術と、積み重ねてきた経験を基に、どうやったらうまくいくかを考えながら木を切りまします。思いどおり倒すことができたときに自身の成長を実感できることも、魅力の一つですね」と語ります。

頼られる人材になりたい。

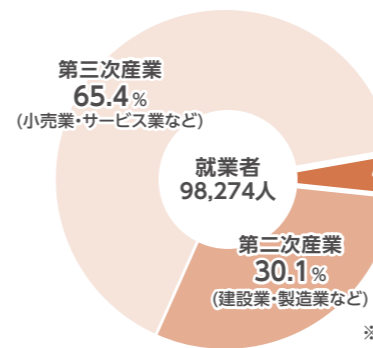
これまで約5年間、林業を経験し



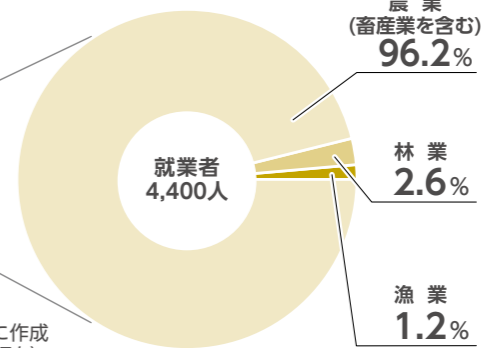
特集 第一次産業で輝く若きチカラ

地域の気候・風土に根差し、自然の恵みを糧にする農業・林業・漁業などの「第一次産業」。市内の全産業の合計就業者数に占める割合は多くはありませんが、食料や原材料の安定的な確保はもちろん、自然災害の防止、自然環境の保全、地域社会の維持など、さまざまな役割を担う重要な産業分野です。今号では、そんな第一次産業で活躍している若者を取材しました。新たな視点と感性で未来を切り開く皆さんの、情熱と挑戦の一端を紹介します。

【上越市の産業別就業者割合】



【第一次産業の業種別割合】



※国勢調査の資料を基に作成 (令和2年10月1日現在)

てきた江口さん。「まだ自分は一人前だとは思っていません」と自身を評価し「技術は先輩から学ぶことはもちろん、SNSで動画を見て学ぶこともありまます」と、向上心を持って日々林業に向き合っています。

令和6年の抱負を聞いたところ「だんだんと後輩が増えてきたので、自分自身の技術の向上はもちろんのこと、後輩のサポートにも気を配り、一緒に成長していきたいです」と笑顔で答えてくれました。



①クサビ(上)。木を倒すときにチェーンソーで事前に入れた切れ込みにハンマー(下)で打ち込む。②林内から集積場所まで材を運ぶ「フォワーダ」と呼ばれる重機。③チェーンソーのメンテナンス。④伐採した木。切り口を見て木の状態が分かるという。⑤特殊伐採。⑥休憩中に雑談で盛り上がる皆さん。一番手前が江口さん。⑦間伐作業。



大好きな地元で漁師として奮闘中



とさかわ 常盤丸
川口 翔大さん(28歳)
(名立区)

①帰港する常盤丸。②船を固定するロープを準備中。
③甘エビを手際よく大・中・小の大きさに選別。
④川口さん(左)と船長の板谷さん。⑤水揚げされた甘エビ。⑥箱詰め作業。⑦底引き網漁で使用する網。リールでワイヤーを巻いて網を引き上げる。



きょうだいで畜産業への道を決意



たきもと農産有限公司
滝本 瑞樹さん(26歳) 千裕さん(21歳)
(和田区)

きっかけはもの珍しさから。

田んぼに囲まれた牛舎で肉用牛の繁殖経営をきょうだいで行う、たきもと農産有限公司の滝本瑞樹さんと妹の千裕さん。稲作を行う傍ら、畜産業にも力を入れています。

瑞樹さんは、約10年前に父親が牛を飼い始めたことをきっかけに「この辺では珍しいことだから、父の代だけでなく次代へつないでいきたい」と感じ、畜産の道に進むことを決意。新潟県農業大学校で畜産業を学び、農業機械の操縦に関する免許や「家畜人工授精師」の免許を取得しました。その後、同じ思いで千裕さんも同校に入学し、畜産業を学びました。

2人は卒業後に上越市へUターンし、約20頭の「黒毛和種」を飼育しています。母牛に子牛を産ませ、その子牛を約9カ月育てて販売する「繁殖経営」と呼ばれる経営を行っています。販売した子牛は「肥育経営」を行う畜産農家が購入し、肉用牛として育てられます。繁殖経営では、母牛の発情期を逃さずに見極め、人工的に授精をする必要があるため、2人は日頃から入念に牛の様子や健康状態をチェックします。牛の出産前は昼夜を問わず頻繁に牛舎に通い、安全に出産ができるよう、見守りとサポートをします。

健康で良質な牛を育てるために。

「実際に始めてみると、分からないことが多かったですね。多くの畜産農家と取引がある餌の業者に、学校では教わらなかったことを教えてもらったり、同じように市内で畜産業を営んでいる人と情報交換をしたりして、試行錯誤してきました」と振り返る瑞樹さん。最初は3頭だった牛が、今では約20頭にまで増えました。牛舎では、牛はロープにつな

慣れ親しんだ海が仕事場に。

子どもの頃から海で釣りをすることが好きで、高校生のときに漁師を志した川口翔大さん。現船長の板谷さんからの誘いもあり、高校を卒業した後、地元の名立漁港を拠点に漁を始めました。

「漁は危険が伴うので、初めはとにかく安全に漁を行うための知識を先輩から習いました」と話し「船に乗り始めた頃は船酔いがひどく、慣れるまではとても苦労しましたね」と当時を振り返ります。

日々の努力がやりがいを生む。

川口さんが乗る漁船「常盤丸」は、主に甘エビ漁を行います。漁法は、「底引き網漁」。水深約500メートルまで下ろした袋状の網を約2時間かけて船で引き、海底付近の甘エビを取る漁法です。川口さんは、ほぼ通年で船長の板谷さんと2人で漁に出て、日本海の甘エビを狙います。

「朝は早いですよ」と川口さん。午前2時頃に名立漁港を出港すると、沖合で網を下ろしては引き上げる作業を、場所を変えながら行い、午前11時頃に帰港します。帰港後は、水揚げした甘エビを大きさによって選

別し、最後に出荷用の箱詰めを行って1日の作業が終了します。

自然が相手の仕事なので、天気予報のチェックは欠かせません。「日によって多く取れる日もあればその逆もあります。天気や潮の流れ、波の高さなど、毎日変わる条件の中でどうしたら取れるかを研究し、日々試行錯誤しながら経験を積んでいきます」と川口さんは漁の難しさを語り

ます。出荷した甘エビは、市内のスーパーなどに並びます。「自分が取ってきた甘エビを、新鮮な状態で地元の人に買ってもらえることが大きな喜びです。食べてくれた人から『おいしかったよ』と声をかけてもらうと、もっとうれしくなりますね」と照れつつも漁師のやりがいを教えてくれました。

将来は自分も船長になりたい。

今は船長の板谷さんが所有する漁船の乗組員として漁に出る川口さん。「令和6年も事故なく安全に。そして大漁を」と新年の抱負に加えて「将来は、自分の船で船長として漁をしたいです。そのために、これからも日々努力していきます」と力強く語ってくれました。

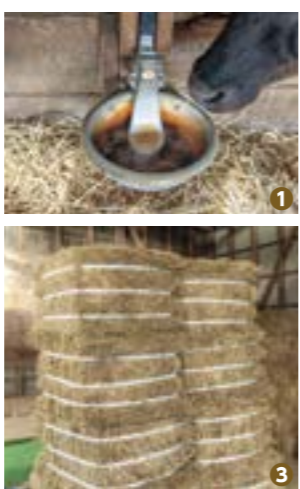
がれていません。「できるだけ牛が自由に動いてストレスがかからないように育てています」と、瑞樹さんは牛を第一に考えた育て方を語りま

す。「令和5年9月には、子牛の発育を評価する『新潟県子牛共進会』でうちの子牛が評価され、優秀賞を受賞しました」と千裕さんは誇らし

げに教えてくれました。

今後は規模を大きくしていきたい。

瑞樹さんと千裕さんは今後の目標について「今の牛舎も使いつつ、いずれは新しい牛舎を建てて、今より多くの牛を飼えるようにしていきたいです」と将来を見据えます。



①牛用の水入れ。牛が中央のレバーを鼻で押すと水が出てたまる構造。②餌を与える千裕さん。③粗飼料と呼ばれる餌(牧草を乾かしたもの)。④濃厚飼料と呼ばれる餌(トウモロコシや大豆などを混ぜたもの)。⑤子牛の耳標番号、名号、給餌量(上から)。一目で分かるように牛舎の柱に設置している。⑥固形の塩。牛はこれをなめて塩分やミネラルを補給する。

もっと!

市ホームページでも、市内で農林水産業に意欲的に取り組む人を紹介しています。ぜひご覧ください。



市ホームページ